

第40号 50円

昭和51年1月25日

内容

- 十年の成果を目的あたりにして… 1
- 開館十周年記念会……………2~3
- 明日に向けて—記念グラフ……………4~5
- 祝辞から……………6~7
- マスコミが十年の歴史を祝う……………7
- 千人会報告・寄付金報告……………8~9
- 第79回大学共同セミナー……………10
- 第80回大学共同セミナー……………11
- 館長日記から……………13
- 業務通信…12 利用状況…13~14

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス
 東京都八王子市下柚木 (☎192-03)
 電話 0426-76-8511~3
 振替口座 東京 74590番
 <東京事務所>
 東京都中央区日本橋本町3-3
 三井銀行本町支店ビル5階
 電話 東京 (241) 3961
 編集・発行人・飯田宗一郎
 製作 中央公論事業出版

十年の成果を目的あたりにして

|| 十周年記念式のこと ||



手塚 富雄

大学セミナー・ハウスにつねづね御無沙汰していることを心苦しく思っていたが、久しぶりで八王子まで出掛け、十周年記念式に列なることができた。発足以来十年年といえ、もう十年にもなるのかと時間の速さを思うのが普通のことだろうが、わたしはその逆に、こんなに成長したセミナー・ハウスの齢がまだ十歳にしかなくていないのかという感じに打たれた。つまりセミナー・ハウスは実に充実した道を歩み、今では日本の大学教育において無視することのできない存在となり、その影響を陰に陽にひろげつつあるので、この十年間を内容的には十年以上の歳月に匹敵するものにしてきたのである。これは実に飯田さんを始めとして館の実務を担当している方々の努力の結果である。わたしはこの記念式で今更ながらそれへの感謝と敬服の思いを新たにしたのであった。

式は正田理事長の挨拶に始まって、簡素に、しかも実質をもって行なわれたのは、ありがたかった。実質をもって、というのは、

ありきたりの式次第ばかりでなく、大塚久雄、板垣興一両博士の講演とそれについての質疑応答を聴くことができたからである。これはいかにもセミナー・ハウスの行事らしい、気持のいいことであった。世の中のこの種の行事が、



記念撮影—来賓、教授、学生がよろこぶ広場で

外的形式を踏むだけでなく、こういう行き方をどンドン採り入れたらいいだろうに、と思った。式の進行につれて、わたしにとって意外なことが起った。飯田館長が立って、この際感謝すべき人々に花束を贈ると言うので、結構なことだと思っていると、まずわたしの名が呼ばれた。初代の企画委員長だったから、というのである。企画委員長だったことに間違いはないが、わたしがセミナー・ハウスのためにしたことといえは実に微々たるもので、感謝をいわれるようなものではない。それにわたしはこの式に出てこんな指名

をされるであろうことは、あらかじめことも聞いてはいなかった。だしぬけのことに当惑しながら、わたしは飯田さんが予定したであろう式の流れをみだすこともいけまいと、とつさの間に考え、こういう際に要求されると思われる最小限度のビヘーヴィアをした。つまり立っておじぎをしてその花束がある未知のお嬢さんの手からいただいた。とは言っても、いただいたのは紅と黄のバラで非常に美しかった。あと

でわたしは飯田さんに個人的に顔を合わせて、「どうもあなたは人が悪い」とこの不意打ちの演出をこぼしたが、これはわたしとしては氏の好意への感謝の言い換えのつもりであった。式場で多くの方にお目にかかったが、中でも上代たの先生のお姿に接したのは喜ばしい限りであった。あのお齢で、しかもこの遠方までお出かけになる熱意には頭がさがるほかはない。飯田さんは上代先生に対しても、予告なしの演出をしたようである。先生に何かを捧げ、それから握手をしようというのである。上代先生はその厚意は受けられたが、握手の方はやわらかに辞退された。飯田さんの独思実行型も人によっては通じないこともあるのだなと思った。

さきほど触れた、大塚、板垣両大家の東西文明についての講演は、現代文明についての問題提起で、実に有意義だった。わかりやすく、そして皆がこの時代に対処する道を考える上での視点とヒントを与えられたのである。また、聴衆の学生諸君の中から活潑な質問が出たのもうれしかった。これもセミナー・ハウスでの経験を経た人たちだからであろう。時間が切迫しないでもっと思想の交換があればいいと思ったのは、わたし一人ではなかつたらう。

(東京大学名誉教授、当法人評議員)

大学共同体を創った十年の歴史を祝う

開館十周年記念会

昭和50年11月1日

好天に恵まれた11月1日、晩秋の多摩の丘に歓喜の讃歌が流れた。開館十周年の幕あげとして3月7日、『大学を開く』の出版記念会が行われ、6月27日には大学院セミナー館の落成と遠来荘の移築完成を祝ったが、ここに至って十周年記念の一連の行事はいよいよクライマックスを迎えたわけである。当日は来賓というよりはむしろ身内の者として、約三五〇名の方々が十年の歳月に万感をこめてご出席下さった。昭和40年7月の開館以来、当ハウスを利用された先生や学生は延べ三七万人を教え、法人のカー

ドに登録された先生方、後援者は三、七〇〇名、国公私立大学の協力会員校は四七校となった。まさしく十年の年輪を加えたわけである。一方、開館当時はわずばかりの民家が点在する丘陵地帯であった周辺の多摩の自然は、この十年の間に宅地開発によって変貌した。しかし、ここを利用されたゼミの方々が植えられた多くの記念樹がみごとに育って、美しいキャンパスを作っている。

寄贈者の思い出多き青葉かな 岡本 定次

■記念式典

東京学芸大学講師・宮田清氏のピアノによるポロネーズの調べによって開会。

司会の聖心女子大学教授・岡宏子氏は開会を宣しながら、比較的新参者の私が司会者に指名されたのも、「明日に向けて」というテーマで十周年記念が行われることから意図された深遠な考えであろうか、と述べられた。

最初に正田建次郎理事長が開会の挨拶に立ち、十年間に当ハウスが日本の大学教育に果たしてきた役割が今日高く評価されている喜びと今までの各方面からのご支援を感謝し、今後も意義のある仕事が発展して行くために一層のご協力をお願いしたい旨を述べられた。

続いて飯田館長は、初代の企画

委員会委員長・手塚富雄氏が今日ここに出席下さっているの、この記念会のプログラムの中で特別のお礼を申し上げたい旨を述べ、女子学生から手塚先生に感謝の花束が贈呈された。創立当初においては、設立の目的、ハウスの理念を社会にPRする必要があった。まづ学長のサークルに、そして財界人に。しかし最も大切な方たちは、施設が完成した段階で実際にそれを使用されるであろう一般の教授たちなので、ある時は大磯で、ある時は箱根で、「大学教育セミナー」が行われたわけであるが、その企画にご尽力下さったのが手塚先生であった。

引き続き館長は、この秋、大塚久雄先生が文化功労者になられたというビッグ・ニュースに接した喜びを語り、女子学生からお祝いの花束が先生に贈呈された。先生と当ハウスとの関係も開館前にかのぼるわけで、昭和39年5月の安田講堂におけるセミナー・ハウス主催の講演会、40年11月の落成記念セミナー、45年の五周年記念セミナー、そして今回の十周年記念シンポジウムと、再三にわたり記念の行事にご登壇願ったわけである。

次に、勤続十年の職員の表彰が行われ、サービス・センター主任・荒川孝子、食堂マネージャー・酢屋善元、同コック長・高橋敏雄、同接客係・新江とみ子の四氏に理事長から記念品が贈られた。表彰式にはつきものの感謝状にかわって、記念写真を差し上げたという館長の発案があり、参会者の見守る前で表彰者四氏に理事長、館長が加わって記念撮影が行われ、出席者全員からねぎらいの拍手が四氏に贈られた。

■プログラム

昭和50年11月1日(土)

受付開始 (13時30分)
記念写真……………ようこそ広場 (13時45分)

お茶席……………遠来荘
展示「十年の歩み」……………図書館

◆記念会 (14~15時)……………講堂
△司会△
△聖心女子大学教授 岡 宏子
△奏楽△ (ピアノ) 宮田 清

△東京学芸大学講師 宮田 清
○ベートーヴェン作曲||ポロネーズ
△挨拶△ 理事長 正田建次郎
△感謝と表彰△ 同

△開館十周年記念論集『東洋文化と日本』贈呈△
編著者 三枝充恵・今井淳
△独唱△東京学芸大学講師 栗飯原美智子
○シチュエルト作曲||アヴェ・マリア

○ブッチーニ作曲||歌に生き愛に生き(歌劇「トスカ」より)
△祝辞・メッセージ△
東京大学名誉教授 手塚 富雄
文化庁長官 安嶋 弥
法政大学総長 中村 哲
上智大学学長 ヨゼフ・ピタウ

東京都立大学教授 唄 孝一
国際基督教大学教授 都留 春夫
明治学院大学教授 神保 信一
東京大学助教授 木村尚三郎
評論家 筑波 常治
東京農工大学教授 川名 明

東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄
東京工業大学助教授 長松 昭男

国際教育交換協議会極東代表 E・ラングストン

《大学セミナー・ハウス讃歌合唱》
東京学芸大学学生有志 館長 飯田宗一郎
△挨拶△ 宮田 清
△奏楽△ (ピアノ) 宮田 清

○ムソルグスキー作曲||プロムナード、リモージュの市場、キエフの大門(「展覧会の絵」より)
◆記念シンポジウム (15~17時30分)
△司会△
立教大学教授 小林 昇
「明日の世界を考える」
東京大学名誉教授 大塚 久雄
一橋大学名誉教授 板垣 與一

◆お祝いパーティ・学際サロン
……………大学院セミナー館
△乾杯△ 顧問 山内 恭彦
◆10年10発花火10分 (19時20分~30分)
……………ようこそ広場

◆学生交歓レクリエーション・ナイト……………ようこそ広場
ボン・ファイア
ガーデン・パーティ

——*——
◆オープン・ハウス 11月2日(日)
食堂主催ティー・パーティ
遠来荘茶席

続いて、開館十周年を祝って編さんされた記念論集『東洋文化と日本』が編著者のお一人である筑波大学教授・三枝充恵氏より理事長に贈呈された。この論集は昨年11月の第73回大学共同セミナー「東洋と日本」を指導された先生方によってまとめられたものである。

ここで少し固い雰囲気ほぐすべく、東京学芸大学講師・粟飯原美智子氏の独唱が入り、美しいソプラノが会場に快く響きわたった。次にご出席の方々からお祝いのメッセージをいただいた。題して一分間スピーチ。岡先生の巧みな誘導で創立当時から関係者として、あるいは会員校の利用者、あるいは共同セミナーの指導者として、一三名の方々が思い出を簡潔に語られ、明日のセミナー・ハウスの前途を祝福された(要旨は別掲)。祝電の披露に続いて、東京学芸大学学生有志五人によって、大学セミナー・ハウス讃歌がギターの手奏で唱われた。

最後に挨拶に立った飯田館長は、十年をふり返り、もともと合理的なものがもつとも現実的なものであるということを確認しつつ歩んだ十年であったと述べ、多くの方々のご支援とご協力を感謝された(4頁参照)。終りにハプニングがあり、飯田館長の手卒業生の男女有志から花束が渡され、続いて専修大学教授・土方保氏の可愛いお嬢さんからも花束が贈られ

た。予期しなかった贈物を手に館長の表情もなごんだようであった。

再び宮田清氏によるピアノ演奏で、静かに力強く記念会の幕は閉じられた。

【主な来賓】(敬称略・順不同)

上代たの、山内恭彦、川喜田愛郎、小谷正雄、川田侃夫妻、内藤正夫妻、三宅彰、望月経治夫妻、横山紘一、笠木三郎、大東百合子、宮下啓三、飯島宗孝、石井正博、伊能敬、石井千尋、今井義夫、井手久登、岩崎代志治、大野泰雄、押田勇雄、小田切松義、岡崎正、小倉芳彦、岡田真、笠松章、川瀬謙一郎、北野美枝子、岸本実、榊原繁雄、正慶孝、高倉正治、田北敏行、千野熊男、椿弘一、寺川国秀、中村哲哉、成瀬治、仲勝司、中尾由矩子、根本松彦、平松幸一、土方保夫妻、細田友雄、松崎義徳、松崎三次、南義清、三村卓雄、三宅豊彦、本行孝司、安良岡康作、渡辺愈、早川豊水、宮田研二、池田篤、郡山正

■記念シンポジウム

―明日の世界を考える―

式典の後に五分間の休憩をおき、ひきつづいてシンポジウムが講堂で開催された。

開会に当って飯田館長は、テーマにふさわしいお人柄であり学者であられる大塚久雄、板垣與一両先生によってシンポジウムが実現したことの幸わせと、両先生の組

み合せによるシンポジウムは長い間当ハウスの念願であったことを述べ、進行を立教大学教授小林昇氏にバトンタッチされた。小林教授はお二人の先生の主著を通してご専門の領域を紹介され、それぞれのご発題に移った。

明日の世界を考えるために、今日の社会がどのような構造のものであって、どのように動きつつあるかを、まず最初に大塚先生が主として歴史家としての立場から、次に板垣先生が諸国家、諸民族の織りなす現在世界の問題から採り上げられた。

限られた時間ではあったが、司会者の巧みな進行によって会場からの質問が整理され、密度の高い質疑応答が行われた。

最後に、出席者を代表して当法人の評議員でもあられる上智大学教授・川田侃氏が大塚先生と板垣先生にお礼の言葉を述べられた。特に会場の若い学生諸君に向けて、今日の大きなスケールのお話の背後には、非常に緻密な過去の一つの一つの歴史的な事実と現実的事象の研究が裏打ちされているということ、スケールの大きさにのみ眩惑されることなく読みとってほしいと語られた。

■お祝いパーティ

学際サロンと銘打った、当日のお客様を中心とするお祝いパーティは、当ハウスの顧問山内恭彦博士の音頭による乾杯で開会され

た。大学院セミナー館にセットされた食卓を囲んで話の輪が広がり、学際サロンと呼ぶにふさわしい光景があちこちに現出した。7時20分には開館十周年を祝って十本の火花が打ち上げられた。

この火花は当ハウス開館以来の洗濯業者サンエスクリーナーの関口実氏のご寄付によるものである。けだし気のきいたお祝いとして大好評であった。大学院セミナー館からようこそ広場に足を運ばれた参会者の方々は、晩秋の夜空を高く仰ぎながら、美しく咲いた大輪の花を賞しまれ、別れを惜しんで多摩の丘をあとにされた。

■好評だったお茶席と展示「十年の歩み」

式典に並行して、遠来荘ではやすらぎの茶席が設けられ、表千家の矢内宗紫先生とお弟子さんたちによるお点前の招待があった。当日来館されたお客様にお薄を召し上っていただきながら、多摩の晩秋を十分に味わっていただいた。なお、十周年のお祝いに、加藤六美前理事長より先生ご自身がお焼きになった茶碗が遠来荘に寄贈された。ちなみに先生はこの茶碗の銘を「夜学」とつけられている。

また、図書館では「十年の歩み」と題する展示が行われ、入口には文字通り十年間風雨にたえて活躍した標識(入口の看板)が飾られた。会場いっぱい貼られた写真によって創立から現在に至るまで

の歴史が語られ、また資料としては設立発起人による歴史的な署名や、作詩者自筆の大学セミナー・ハウス讃歌、佐藤喜一郎氏の「真理」の書、来館者の署名を集めたサイン帳などをはじめ、当ハウスの出版物、刊行物、当ハウスが紹介されている雑誌、新聞記事の切抜き帳などが並べられた。

■学生交歓

レクリエーション・ナイト

当夜の在泊者(六グループ、一九〇名)が参加して十周年のお祝いの集いの最終幕を飾ったのが、このプログラムであった。ようこそ広場に紅の提燈がともされ、おでんとおにぎりや甘酒の屋台が並び、ビールも販売された。

セミナー室での演習を終えて集まった学生たちは予想外のごちそうに大喜び。たき火を囲む若い人の笑い声が一段と高くなる。どこからともなくセミナー・ハウス万歳の声がわきおこり、胴上げをされた飯田館長の体が宙に浮いた。多摩の丘はまさしく若人の丘であった。

旺盛な食欲を示した若者たちはこのあと講堂に移り、約一時間ほどフォーク・ダンス、即興劇、歌などを思う存分楽しんで、それぞれの宿舎にひきあげていった。

夜空はあくまで星が輝き、心配された晩秋の冷え込みもなく、まことに好天に恵まれた一日であった。

向って

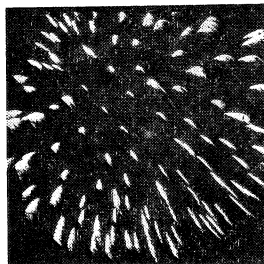
人と行事＝



よるこび (上代, 飯田)



記念シンポジウム



夜空に打ち上げられた花火



学芸大生による讃歌合唱



正面右から板垣, 大塚両教授, 左端は川田教授



花火を仰ぎ見る上代先生 (中央)



展示会場



司会の岡宏子教授

◆あいさつ

館長 飯田宗一郎

秋の多摩の丘にたくさんの方々においでいただき感謝申し上げます。

もっとも原理的なものも現実的なものである、セミナー・ハウスはそれをやろうとしているから、私は大いに興味をもって応援しますよ、とおっしゃられたのは南原繁先生であります。そして十年前の落成式のあのパーティで、乾杯をしていただいたのも南原先生でありました。今、その先生はこの世におられず、この喜びの日を共にすることはできません。私はこうした激励に支えられて十年間を歩んでまいりました。

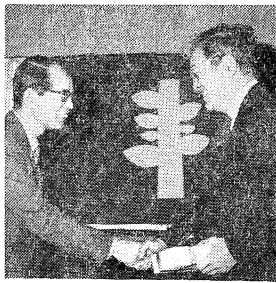
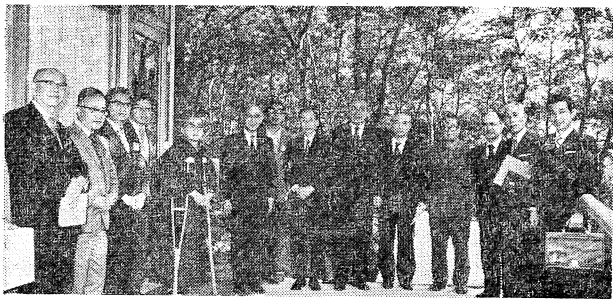
そしてご覧のとおり司会者も会員の先生、祝辞・メッセージをしていただく方も、音楽を演奏して下さる方もまた会員の先生であり、ここに今日集まっておられる学生も、おそらく四〇校近い会員校から来ておられるのであります。大学の壁を越えて先生も学生も共に集まって勉強するというのが現実的なものとなつて、この講堂の中に実現されているということになります。

はじめは一人、二人と協力者を求めながら歩んでおりました。そしてそれは極めて Inter-personal なものでありましたが、やがて大学と大学の中に共同意識をつくり

Inter-university になってまいりました。そして十年間の中で日本が国際化するとともに、大学セミナー・ハウスもまた世界に眼を向けなければならなくなって、International な活動が加わってまいりました。

先ほどご紹介をしました十年勤続職員、さらにまた三〇名近い職員とともにこの丘を守り、日常の業務を行ってまいりました。そしてまた、たくさん利用された皆さんがここに記念樹を植えて下さいました。おそらく皆さんは、この丘に久しぶりでおいで下さって、このキャンパスの中を歩かれ、これご自分のゼミで、あるいは共同セミナーで植えた樹であるということを確認しながら、樹を植えることを意味を共感して下さったのではないかと思います。多くの方がいろいろな立場で協力して下さいました。先生も、学生も、財界人も、文部省の方も、それぞれの立場で参加して下さったということが実を結んで今日に至りました。これからシンポジウムをお聞きすることによって、大学セミナー・ハウスは明日に向って何をなすべきかを学びつつ、明日の活動の中に移して行きたいと思ひます。

思ひおこせば、一大学が使うのではなく、みんなが使うということは大変よいことだからと言って、三井銀行の佐藤喜一郎氏が募金の片棒というより大元締をかつ



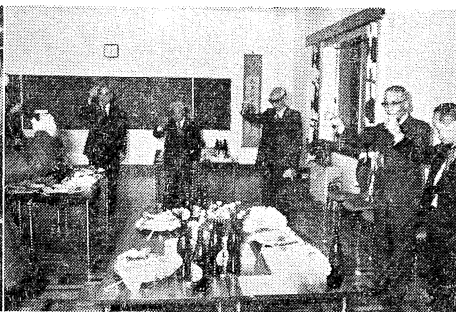
左から手塚、木村、公文、吉田、大塚、板垣、茅、小林、正田、安嶋、中嶋、ピタウ、飯田、筑波

記念論集を贈呈する三枝教授(左)

明日に ＝記念グラフ



学際サロン



乾杯をする山内恭彦博士(中央)



レクリエーション・ナイト

◆開館十周年お祝い募金のお願ひ—金額はお気に召すまま—

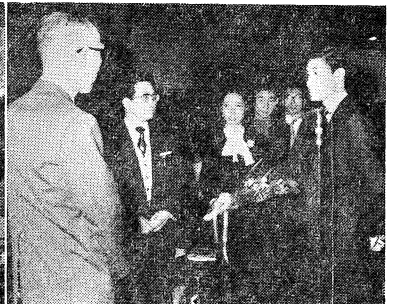
目標額 三〇〇万円

第一 多摩の民家遠来荘のために
……一八〇万円

学びの庭にカヤブキ民家はセミナー・ハウスにびつたりの新名所です。時々セミナーにも使われますが、外人接待の茶会とか大学の華道部の練習にまたとない茶室として使われます。現在、茶道具が



十年勤続者—右から酢屋、新江、荒川、高橋



卒業生から祝辞を受ける飯田館長

て出て下さいましたが、その方も残念なことに今は私どもとこの喜びを共にすることができません。実は私の心の中には一七年の歴史があります。当時の日本女子大学学長上代たの先生をお訪ねし、初めてこの構想を打ち明けたのが昭和34年1月でありました。inter-personal なはじまりは、まずそこから出発したと言ってよいわけ

【飯田館長宛の書簡から】

あの日はいろいろの感慨にふけりました。ほんとうにいい会でした。飯田様はじめハウスの皆様様の永年のご努力の有難さが身になりました。それだけに、食堂のマネージャー氏をはじめとする永年勤務の方々への表彰感謝のもよおしが一番うれしく、心をこめて拍手したことです。

唄 孝一

本日ご丁寧なお手紙に同封され

でありました。昨年、米寿をお祝いになりました。上代先生はお元気で今日ここにお見えです。先生にお立ちいただいて、皆さんからお礼を捧げていただきたいと思えます。満場の拍手を私どもの心からの感謝のしるしとして、上代先生どうぞお受け取り願います。万感を言葉にかえて心からのご挨拶を終わらせていただきます。

た記念会当日のスナップ写真三葉ご恵贈たまわり、いつも作らのご芳情有難く厚く御礼申し上げます。殊に大塚久雄先生と同じ机に両手をつけて川田教授のことばに聴き入っている姿はわれ乍らほほえましく、まことに千載一遇とはこのこと厚く御礼申し上げます。これからさきの十年間にさらに大きな飛躍と発展があることを期待し、否、確信いたしております。益々の御勇健を祈り上げます。 板垣 與一

◆開館十周年お祝い募金のお願ひ—金額はお気に召すまま—

目標額 三〇〇万円

第一 多摩の民家遠来荘のために
……一八〇万円

学びの庭にカヤブキ民家はセミナー・ハウスにびつたりの新名所です。時々セミナーにも使われますが、外人接待の茶会とか大学の華道部の練習にまたとない茶室として使われます。現在、茶道具が

評でした。学会・研究会・院生コンパなどによく利用されますが、学者サロンとしては設備が不足です。気のきいた飲食接待用の食器道具類がほしいです。

第三 講堂の映写機のために
……七〇万円

第二 大学院セミナー館のために
……五〇万円

開館十周年記念会の学際サロンは初めての試みでしたが、大変好

学会の発表に、学生の交歓に、大学のオリエンテーションに、どうしても必要です。講堂の利用価値はこれで倍加します。

祝 辞

▲来賓代表



安嶋 弥
(文化庁長官)

創立十年史「大学を開く」の中に、昭和37年に国立大学が協力校としての分担金を出すことが認められたというくだりがあります。私が、私は当時、文部省大臣官房会計課におりましたので、大学セミナー・ハウスのかわりには、これが最初でございます。

爾来、一四年がたっているわけですが、それほどお力になれたわけではありませんが、たえず気にかかってきた施設の一つでございます。



ヨゼフ・ピタウ
(上智大学学長)

おめでとうございます。また、心から感謝いたします。また、大学セミナー・ハウスによって各大学にも大きな刺激があらわれ、私たちが大学の間で人間関係

のことももう一度悟るようになりました。学生は何のために大学に来るかということ、セミナー・ハウスに参加した先生方、学生達は真剣に考えていたということ、す。主体性、人間関係、そして社会的責任、この三つの目的で大学に来る。セミナー・ハウスはこの目的を悟らせるために大きな役割を果たしたのです。

▲セミナーの指導者として



都留 春夫
(国際基督教大学教授)

昨日、学生が私のところに話しまいに、次のようなことを言いました。学生には二つの顔がある。大学に入って来たとなんによそ行きの顔になって、悩みがないかの如く振舞う。誰かに自由に話したいと思つて、その相手を大学に探しに来るのだけれど、お互いに何か話にくい雰囲気がある。しかも、それが学生と教師の間にもある。

これは、大学がなんとかしなければいけないことであり、努力はしていることですが、今の大学には限界があります。そういうものをセミナー・ハウスが今まで埋めてきてくれたというふうに思っています。これからも大学は、セミナー・ハウスとともに、学生が実りのある大学生活を続けていけるように努力していきたい、及ばずながら私もお手伝いさせていただけ

▲常連の利用者の一人として



神保 信一
(明治学院大学教授)

次の十年にも、今の表彰者の方が脱落しないで、またその二倍にも三倍にも増えてここで表彰をお受けになるように期待をしたいと思つています。

館長先生には、お金がなくてもいろいろなことができるということとを学びましたので、私も自分の大学で似たようなセミナーをいたしております。いつも施設が満杯になって、職員の方々に迷惑をおかけておりますが、これもセミナー・ハウスのお蔭だと思つております。私が利用者としてここで選び出されたのは、非常に利用率が高いことだろうと思つていますが、多いことは良いことだといふことは果たしてどうかかわりませんので、チヨコレートのように甘くならないようにしたいと思つています。

▲共同セミナー委員長として



木村尚三郎
(東京大学助教授)

世の中は不況だと申しますが、大学共同セミナーはますます拡大、発展の一途をたどっており、飯田館長をはじめ第1回共同セミナーの運営委員長であられた永井

現文部大臣や諸先生のご努力の賜と存しております。

昨日から十周年に当たって第80回共同セミナーを開催いたしておりますが、諸先生方のご協力を得て「明日の世界を考える」というテーマの下で大変充実したセッション演習を順調に進めております。

今後、ますます先生方のご協力をいただきまして、大学共同セミナーがいよいよ発展していくことを願つてやみません。

▲千人会員の一人として



筑波 常治
(評論家)

この十年の間に、私がここにいりました日数をあらためて数えてみましたが、たったの七日間だけであります。減多に來ないのであります。けれども、八王子の丘にこういふものがあつて、来る気になれなれいでも行けると考えることは、十年間まことに楽しく、心強いことございました。一層のご発展をお祈りいたします。

▲教員懇談会から



川名 明
(東京農工大学教授)

大学教員懇談会と申しますのは特定の集まりではなく、飯田館長その他の方々が指導下さいまして世話人を決め、その時々大学の問題を、専門の、あるいは興味

を持つている先生方が集まつて話し合つている会でありませう。

私も、大学紛争まではアドミニストレーションに何か興味を持っては学問の冒とくのような気がして、もっぱら勉強をしなくてはいけないというつもりでおりますのですけれども、学内でも問題が多くなり、悩みも多くなつてまいりましたときに、ちょうど格好の企画がありました。非常に格差の大きく、またいろいろな立場の方がおられる大学で、それぞれの考え方をつき合せてみる、そして各大学の教授会にそれらを持ち帰るといふことが、お互いの大学の発展に非常に役立つことを私は発見いたしました。国際交流、入試問題等々、いろいろなことを検討してきております。

今後、ご指導いただきまして、この会がますます発展していくように祈つています。

▲国際学生セミナーから



中嶋 嶺雄
(東京外国語大学教授)

アジアの大学はどこでも丘あり森ありという大変すばらしい環境にあるところが多いわけですが、日本の大学の大部分はキャンパスに恵まれず、大学らしい雰囲気がありません。しかも、そういうアジアから多くの留学生が来ております。そこで私は内心うしろめたいものがあるのですが、留学生の

方々に大学セミナー・ハウスに行きなさい、ということをもいつも言えることを大変誇りにしているわけでございます。今日もシンガポールからの留学生を一人連れてまいりました。

過去四年間にわたり国際学生セミナーが開かれ、東南アジアの留学生の方々を中心に、日本の学生と夜を徹して日本とアジアのかかわり合いを、時には激論し、時には涙を流さんばかりに論じ合いました。今日、アジアの激動の中でこの丘において語り合った諸君がそれぞれの部所である時のセミナー・ハウスでの体験を思いおこして、それぞれに明日の世界を考えていってくださるのではないかと、うふうに思います。

▲海外の利用者として



E・ラングスン
トーン
(国際教育交換協議会 議会議長代表)

日米間の学生の教育的な交流を始めるために、ちょうど十年前、私は協議会の代表として日本にまわりました。それから間もなくして落成式に招かれ、こちらにうかがったわけです。その後飯田さんに大変お世話になりました。このことを感謝申し上げます。

大学セミナー・ハウスは珍らしく面白い建築と、そして最もよいことは美しい環境を減ほさないで非常に落ちついた立派な雰囲気をつくっているということに、私は

感心いたしました。

これからも立派な活動を続けられるようにお祈り申し上げます。

▲セミナーの卒業生として



長松 昭男
(東京工業大学 学助教授)

先ほど三枝先生がお触れになりました第3回大学共同セミナーに学生として参加したが、私がセミナー・ハウスにお世話になった最初でありますから、私はいわば三男坊であります。その時はじめて精神のな触れ合いの場を発見し、強烈な印象を受けたことを今でも覚えております。

このモットーであります「生活は簡素に、思想は高潔に」を覚えていただいでから十年たちまして、ふり返ってみますと、今守っているのは生活は簡素にということだけで、非常に恥しい気がします。時々、おやじでございます飯田先生に「前の方も忘れるなよ」とお叱りを受けますが、学問研究の最先端に一兵卒として戦い合っているうちかなり専門バカになつてまいりましたので、そのうちにここへ来て、また洗脳してもらわなければと思っております。

息子としまして、この十年間、セミナー・ハウスを支えて来て下さった先輩、先生方、職員の方々に心から感謝したいと思います。

◆すばらしい記念の企て、マスコミが十年の歴史を祝う◆

①日本経済新聞(50年10月31日) 大学セミナーの丘

—開かれた大学めざして十周年

記念会の前日に、日経の文化欄に飯田館長が前記のような標題で簡単な十年の歴史を書いたことは、時宜を得た新聞の協力であった。創立の経緯から現在に至るまでの活動状況を、どちらかという

②文芸春秋 (50年12月号) 現代の松下村塾(座談会)

《司会者》東大助教授 木村尚三郎

《出席者》 文部大臣 永井 道雄

東大総長 林 健太郎

上智大教授 渡部 昇一

館長 飯田宗一郎

標題は「現代の松下村塾」とな

っているが、それは、大学セ

ミナー・ハウスのことなのだから、

ジャーナリズムの感覚は新鮮であ

外規程の適用をうけなければなら

ない旨の説明があつて、異議なく

承認された。

○神奈川大学(三学部)

○工学院大学(一学部)

○芝浦工業大学(一学部)

○短期大学を準会員校「仮称」として取扱う場合について

る。しかも一方にはますます過熱する受験競争があり、行きづまりの教育の現状を打開するために「私塾」の自由な気風を見直そうとする風潮がある。そのときに登場したのが大学セミナー・ハウスの十年である。共同セミナー委員長の木村尚三郎先生が司会者をされたので座談会は極めて好調であった。永井文部大臣は人も知るセミナー・ハウスの支持者として、林東大総長は大学人として、この座談会の適役であった。

員校の申込みを全員異議なく承認した。

二、三の短期大学から協力会員校に準じた取扱いにつき検討されたいとの要請があるので、この制度について諮られたが、後日再検討することとした。

【報告】

つぎの各項について夫々の資料にもとづいて詳細に報告された。

(1)昭和50年度上半期の収支計算

(2)開館十周年記念論集の発刊

(3)開館十周年記念会の開催

(4)昭和50年度上半期における施設の利用状況

第31回理事会

10月15日(水)17時30分
銀行クラブ(千代田区丸の内)

【出席者】

△理事 正田建次郎、中村哲、村井資長、中川富弥、勝木保次、福原満洲男の六氏(飯田館長は文芸春秋主催の座談会に出席のため欠席)外に委任状による出席一六氏

△監事 太田善磨

【議事】

(1)国際交流オリエンテーション・センター建築に関する建築基準法「用途規制の例外」の申請について

計画の建築面積が限度面積を超えるため八王子市に用途規制の例

を参照して、気のきいた祝意であった。

(1)昭和50年度上半期の収支計算

(2)開館十周年記念論集の発刊

(3)開館十周年記念会の開催

(4)昭和50年度上半期における施設の利用状況

◆千人会報告

◇入会のことば

今年5月に学生とゼミ合宿でお世話になり、セミナー・ハウスの趣旨に共鳴していただきましたところ、10月31日の日経新聞紙上で飯田館長の話を伺い、大いに感動した次第です。ささやかな協力をさせていただきます。またお世話になります。

神奈川大学助教 小林 甫

共同セミナー「水と文明」に大学四年の時参加いたしました。あの時の新鮮な印象がまだまだ蘇って参ります。よろしくお願いいたします。

一橋大学助手 見目洋子

◇現在会員は、一〇五三名です

大学人 〇二二五名
社会人 〇二二八名
(50年11月末現在)

◇新しく会員となられた方々

〔第29回報告(申込順)〕

- | | | |
|---|------------|--------|
| B | 東京学芸大学助教 | 高橋勇悦殿 |
| C | 法政大学教授 | 鴨沢 巖殿 |
| B | 東京大学教授 | 秋山 虔殿 |
| C | 上智大学助教 | 林 邦夫殿 |
| B | 上智大学教授 | 刈田元司殿 |
| B | 日大二高教諭 | 村上光雄殿 |
| B | 東京理科大学教授 | 近藤 保殿 |
| B | 一橋大学講師 | 佐藤共子殿 |
| B | 武蔵工業大学教授 | 石川静一殿 |
| C | 立教大学総長 | 尾形典男殿 |
| C | 東京理科大学教授 | 板垣雄三殿 |
| B | 東京農工大教授 | 向山文雄殿 |
| C | 電気通信大教授 | 石井正博殿 |
| C | 東京大学教授 | 島内武彦殿 |
| A | 早稲田大学教授 | 池原義郎殿 |
| C | 立教大学総長 | 尾形典男殿 |
| C | 東京大学助教 | 板垣雄三殿 |
| B | 東京理科大学教授 | 梅沢文輔殿 |
| C | 東京大学教授 | 青井和夫殿 |
| C | 日本長期信用銀行勤務 | 柴田泰比古殿 |
| C | 電気通信大学助教 | 鈴木 務殿 |
| B | 国学院大学教授 | 関野昭一殿 |
| B | 慶応義塾大学名誉教授 | 山本敏夫殿 |
| C | 東京農工大大学助教 | 牛島忠広殿 |
| C | 東京大学助手 | 石井 明殿 |
| C | 東京大学助教 | 井手久登殿 |
| C | 慶応義塾高校教員 | 渡辺 愈殿 |
| A | 千葉商科大教授 | 清水昌三殿 |
| C | 慶応義塾大学助教 | 山岸 健殿 |
| A | 国際基督教大学教授 | 大塚久雄殿 |
| B | 東京都立大教授 | 大蔵隆雄殿 |

- | | | |
|---|----------------|-------|
| C | ユネスコ・アジア文化センター | 海野 優殿 |
| C | 工学院大学教授 | 中島康孝殿 |
| B | 茨城大学助教 | 朝野洋一殿 |
| A | 明治大学教授 | 柴田政利殿 |
| B | 日本大学教授 | 高須裕三殿 |
| C | 神奈川大学助教 | 小林 甫殿 |
| C | 一橋大学助手 | 見目洋子殿 |
| B | 三井銀行常務取締役 | 三辺正雄殿 |
| B | 三井銀行常務取締役 | 金子 靖殿 |
| B | 三井銀行取締役社長 | 板倉讓治殿 |
- ◇会費ありがとうございました
昭和50年9月〜11月 (敬称略)

- | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 江忠男、内ヶ崎賢五郎、森川和久、鈴木忠義、小田切美文、堀川浩甫、栗原照子、森口繁一、田端光美、末松安晴、井門富二夫、佐々木克己、天利長三、久武雅夫、大竹誠、安達義明、木村富夫、高橋泰蔵、神田信夫、磯山貞登、加藤一郎、重田信一、安達健、長津一郎、沖中重雄、中島斌雄、今井淳、鈴木喬、柴田愛子、小堀桂一郎、小林善彦、大村政男、小田中敏男、辻キヨ、藤永保、中村進、田村猷、神山妙子、板垣與一、杉沢新一、田北敏行、清水英夫、江尻美穂子、伏見弘、小川芳男、松田稔子、永沢越郎、満尾寿男、森井真、川原栄峰、石川正一、白井常、宇都栄子、多賀義高、横田洋三、鶴岡義一、森岡清美、小河原正己、堀信一、高橋三郎、岩下秀男、松延博、赤堀四郎、佐原六郎、宇野重昭、泉治典、宮崎繁樹、森田信義、岩浅武雄、新井勝敏、飯島宗享、秋田成就、貝塚爽平、伊藤修、尾形 |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

◆寄付金報告

◇寄付金に添えて

謹啓 開館十周年記念会へのご案内
内ありがとうございます。
飯田館長の雄大な夢がみごとに実現し、十周年を迎えられましたこと心からお祝い申し上げます。
さて記念会に参加のこと、当ゼミでも相談しましたが、あいにく

典男、勘盛晴、三輪光雄、磯部浩一、福田隆義、坂口順治、笹島恒輔、山本登、内田章五、玉虫文一、田中弥寿雄、岡本定次、羽根田操、石川吉右衛門、小川捷之、清水護、前田陽一、齋川仁、角倉一朗、伯東株式会社、山本大二郎、吉武泰水、深沢宏、木村増三、中尾由矩子、祖父江孝男、田中外次、平井久、高野雄一、大須賀節雄、金田品二、馬場明男、宇野義方、衛藤藩吉、飯田栄、藤林宏一、外池孝雄、弓削三男、吉沢英子、長尾龍一、鴨沢巖、秋山虔、石井素介、内山力、三村卓雄、大沢綱一郎、神保信一、森恭三、北沢佐雄、野田良之、山口喬、大友昌子、小島蓉子、中島邦男、柴田泰比古、坂野観司、増田武男、岡島真理、飯田八千代、飯田恵、岩崎代志治、井手久登、渡辺愈、山岸健、海野優、佐藤共子、高須裕三、奥繁光、市川孝正、朝野洋一

大学祭で学生は各クラブやゼミでの行事があり、また就職試験とも重なったりしまして当日出席の見込みが定かでありません。
それで、とりあえず平素のお礼と十周年のお祝いの敬意を表するため些少ながら同封送金します。
何かのご用にお立て下さい。
青山学院大学教授 羽田三郎

◇いぎのようにご支援をいただき感謝して拝受いたしました。

◎一般寄付金

(50年11月現在)

- 50,000円 東京大学鈴木ゼミ殿
- 49,000円 慶応大学西川ゼミ殿
- 31,850円 成蹊大学宇野ゼミ殿
- 10,000円 東京医科歯科大学 元学長 太田敬三殿
- 10,000円 東映生田スタジオ
- 50,000円 大竹昭男殿
- 50,000円 東京都立大学助教 淵倫彦殿
- 50,000円 東京大学早川研究室殿
- 10,000円 第27回日米学生会議殿

◎開館十周年記念映写機購入募金

(50年11月現在)

- 10,000円 家政学論研究会 家庭経営学研究会 上智大学教授 鈴木皇殿
- 50,000円 東京大学 ギリシヤ語ゼミ殿
- 50,000円 井土ヶ谷教会殿
- 70,000円 法政大学益田ゼミ殿
- 60,000円 第79回共同セミナー参加者殿
- 10,000円 関西学院大学 院長 久野康殿
- 20,000円 東京大学助教 川西進殿
- 30,000円 立正大学杉沢ゼミ殿
- 60,000円 映写機募金箱
- 30,000円 東京医科歯科大学 教授 伊藤秀夫殿
- 50,000円 日本看護協会 東京都支部殿
- 10,000円 青山学院大学教授 羽田三郎殿
- 50,000円 右田病院長 松本樺太殿
- 50,000円 仲野電機製作所 社長 千野熊男殿
- 30,000円 都立白鷗高校教諭 岡崎正殿
- 30,000円 中山町舎長 栗原清吉殿
- 30,000円 当ハウス 元職員 豊島広司殿
- 10,000円 上智大学長 ヨゼフ・ピタウ殿
- 10,000円 神田精養軒 望月継治殿
- 30,000円 東京女子大学図書館 樋口美智恵殿
- 50,000円 館長夫人 飯田八千代殿
- 20,000円 当ハウス元職員 押切栄子殿
- 10,000円 国際基督教大学教授 都留春夫殿
- 10,000円 中富商事 中富光国殿
- 10,000円 当ハウス職員 荒川孝子殿
- 30,000円 当ハウス職員 飯田能子殿
- 20,000円 開館十周年記念募金箱
- 15,000円 第80回共同セミナー 指導教授殿
- 10,000円 第80回共同セミナー 参加者一同殿
- 20,000円 当ハウス食堂職員 高橋敏雄殿
- 50,000円 東京郵政局セールの マネジメント研修員一同殿
- 10,000円 地球化学討論会 準備委員会殿
- 50,000円 日本大学教授

- 15,000円 終身理事 上代たの殿
- 30,000円 専修大学教授 山本満殿
- 10,000円 ユニオン映画殿
- 計 六四九七〇〇円

◎植樹基金

- 10,000円 新生活運動協会殿
- 10,000円 白梅学園短期大学殿
- 10,000円 大学英语教育学会
- 第9回夏期ゼミ参加者殿
- 50,000円 相模女子大学茶道教室殿
- 10,000円 東京高等裁判所
- 30,000円 家庭裁判所調査官研修会殿
- 30,000円 産業能率短期大学殿

◎現物寄付

- 水瓶一個 鮎川宗藤殿
- スクリーン一台 矢内宗紫殿
- 計測自動制御学会殿 古書籍数冊他什器、柱時計 小泉勇二殿
- もくせい一本 東京農工大学 鹿野快男殿
- 茶巾たらい 矢内宗紫殿
- はなみずぎの苗木紅白各一本 白百合学園高等学校校殿 加藤六美殿
- 茶碗
- ◎指定寄付 二七〇〇円(掛時計二個)
- 第76回共同セミナー参加者殿 一七〇〇〇円(傘たて)
- 第77回共同セミナー参加者殿

英国を語る夕べ

クリス・ローソンご夫妻を囲んで

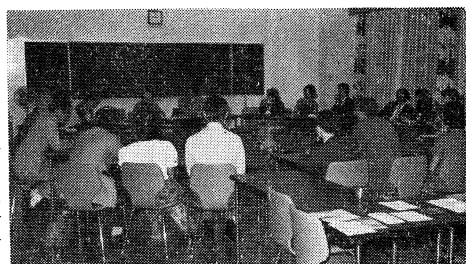
50年9月23日17~21時半

この夕べの集いは、イギリスのパーミンガム市にあるウッドブルック・カレッジでチューターをしておられるクリス・ローソンご夫妻が日本基督教友会の招きで一ヵ月日本に滞在されたのを機会に企画された。当ハウスで日本の大学の先生や学生との交わりを持っていただくことは、日本を知る一つの方法であると考えたからである。

当夜の出席者は、接待役をお引き受け下さった工学院大学教授今井義夫氏ご夫妻をはじめ、江沢洋、川西進、斉藤恵彦、逆瀬川卓幹、徳末愛子の諸教授に、学生側

からは国際関係の八大学共同セミナーの参加者、日米学生会議の関係者、国際学生セミナーの参加者など11名であった。

ウッドブルック・カレッジはクエーカーの経営する小さな全寮制の学舎で、国籍、職業、宗教、性別を問わず、それぞれの関心から勉強に来る人々にひとつの生涯教育の場と機会を提供している。ご夫妻はクエーカーであると同時に、一九六二年から七年間アメリカのマライイで教師をされたこともあり、お話は極めて多方面に及んだ。



英国を語る夕べ(大学院セミナー館)

プログラムはまず、出席者の自己紹介から始まり、立食パーティー、懇談会とつづいた。懇談会はローソン氏のお話を軸に今井教授の司会で進められ、なごやかに質疑応答が行われた。クエーカーの組織とそれを運営していく諸々の意志決定の方法を通して英国人のものの考え方の一端を知ることができたが、何よりも素朴で質素な一英国人の夫妻から、若い学生たちは強い印象を受けたようである。

時は仲秋の好シーズンであったが、折からの雨でプログラムに予定されていた名月を仰ぎながらの交歓会は残念ながら中止せざるを得なかった。しかし、異常な残暑のつづいていた9月によくややく涼がもたらされ、さわやかな秋の一夜となった。

因みにローソン氏は企画室の飯田能子が、ウッドブルックに留学したときのチューターである。

第79回大学共同セミナー

※新入生を歓迎して※

主題——生活と環境——日常生活の中の科学——

期日——昭和50年9月12〜14日

〈全体講義〉
住居の科学

東京大学教授 鈴木成文氏

〈ゲスト講演〉

生存基盤の崩壊、その背後にあるもの—生きのびるために—

東京大学講師 高橋暁正氏

〈セクション演習〉

A 都市と農村

△環境としての都市▽

横浜市技監・企画調整局長 田村 明氏

△農村生活の環境▽

前橋市立工業短期大学教授

持田照夫氏

B 学習活動と社会生活

△学習活動の環境▽

東京都立大学教授 長倉康彦氏

△住民参加の再考察▽

成蹊大学教授 中村八朗氏

C 日常生活、家庭生活

△日常生活を位置づける▽

早稲田大学教授 尾島俊雄氏

△住生活の空間▽

日本女子大学助教授

小川信子氏

〈運営委員長〉

東京大学教授 内田祥哉氏

〈運営委員〉

芝浦工業大学助教授

三井所清典氏
教育施設開発機構職員

沢田誠二氏

〈参加学生〉51名(内女子20名)

早大(7)、共立女大(6)、東工

大、都立大、津田塾大(各3)、一橋

大、日女大、明大、中大、日大、

ICU、千葉大、神奈川県立衛生

短大(各2)、東大、東京学芸大、

電通大、お茶の水女大、慶大、青

学大、立大、武蔵大、上智大、筑

波大、埼玉大、多摩美大、明治短

大(各1) 合計26校

◇◇

理科系のセミナーの開催が共同セミナー委員会で要望されていたことから、建築学の内田祥哉先生が企画運営の中心となられ、これに同門の三井所、沢田両名の若手研究者が意欲的に加わり、別掲のようにかなり学際的なセミナーが実現した。

今回は新入生歓迎セミナーというところもあって、われわれの身近かな日常生活の諸問題を、学問の中にどのようにとらえるかを学ぶというところが、企画に当たってよくに留意された点であった。

セクション演習では二人一組で指導するティーム・ティーチング

を取り入れ、例えば都市と農村のように二つのものを対立させることにより、より立体的に議論を展開させようとする試みがなされた。またゲストの高橋暁正先生には医者立場から、生物体としての人間と環境という視点を加えていただいたことは、このセミナーの構成上意味のあることであつた。

また、創造的な教育環境づくりの実例として、当セミナー・ハウスに少なからぬ関心が指導教授、参加学生の双方から示されたので、キャンパスを一巡しながら、内田先生に建築の機能と環境について解説をしていただいた。



自然と人間性にひたりながら
前橋市立工業短期大学教授 持田 照夫

今回、共同セミナー「生活と環境」の講師に招かれました。ふりかえって考えてみますと、このテーマの題材は意外に身近なところがあるように思われましたので一文を綴ることにしました。

その題材とは、このセミナー・ハウス自身のことです。ここに来た人は誰でも、ああいい所だ、こんな所で勉強できたらどんなにいいだろう、と感じるに違いありません。実際に多くの方が自然と人間性にひたりながら、勉学の成果を持ち帰るのではないでしょう

か。しかし、このような所がなぜ日

このセミナーの共同体の中に、お祭りを加えたいというのが運営委員の方々の希望であった。二日目の夜、内田先生の扮する「火の神」が点火したボン・ファイアを囲んで極めて自発的に歌や踊りが繰り広げられ、楽しい交歓の夕べとなった。

開催期日が、多くの大学で試験期と重なったため、参加者が少なかったのは残念であったが、全期間を通して全体講義の鈴木成文先生をはじめ、セクションを担当された先生方が全員、指導に当たられて、参加学生にとってはまことに恵まれたセミナーとなった。

自然と人間性にひたりながら

持田 照夫

本その他の場所には生まれぬのかを考へる人は少ないと思ひます。実は、この施設も自然にこのようになり立っているのではありませぬ。その証拠に、すぐ近くにまで開発の爪跡が延びて来ています。放っておけば、この辺一帯も緑が一つもなくするような開発の波にさらわれてしまふでしょう。

そこで、「生活と環境」を考へるならば、人間の勉学に深いところから寄与してくれるこのような施設が、なぜここで成立し得て、他の所、つまり他の大学や教育関係の施設では成立しないのかを考へてみなければならぬと思ひま

す。世の中には良いものと悪いものとがあり、それらはそれぞれに善美の姿をし悪の華のケンを競っています。そして、そうなるのもそれぞれの理由があります。そのようにさせる根本の理由、これが「生活と環境」の共通のテーマであるべきでした。そしてその題材の一つとしてこのセミナー・ハウスが取り上げられるべきだと思ひます。ハウス側では照れて自分から言い出されないのでしたら、これをすることは私達の役目であつたと反省しております。

私自身とこのハウスとの最初の出会いは、約十年前、吉阪先生のゼミによられたときでした。坂を登ったとき次々に展開する光景にいたく心を打たれたのを覚えております。土地を削らない、木をそのまま残し更に植樹する、宿舎は分館のハウス式、中央の本部もいかにつくなくラヴリイにできています。建築家の才もさることながら、そのようにさせた見えない力に心を打たれました。この力こそ飯田宗一郎先生でした。発想・実行力・信念ともにずば抜けた人格によって、このハウスはできたものなのです。しかし、個人的問題を越えて科学的に追究されるべき課題がまだ数多く残されているように感じます。「環境研究」のためには、今後、これらのことを真剣に追究していかねばならぬでしょう。

(第79回大学共同セミナー指導教授)

第80回大学共同セミナー

〈開館十周年記念〉

主題——明日の世界を考える

期日——昭和50年10月31日～11月2日

〈全体講義〉

科学技術と明日の世界

組織工学研究所長 糸川英夫氏

〈記念シンポジウム〉

明日の世界を考える

東京大学名誉教授 大塚久雄氏

一橋大学名誉教授 板垣與一氏

(司会)

立教大学教授 小林 昇氏

〈セクション演習〉

A 地球の資源と日本の生き方

東京大学助教授 茅 陽一氏

B イエ社会としての日本

東京大学助教授 公文俊平氏

C 明日の国際政治を動かすもの

—第三世界を中心として—

成蹊大学教授 宇野重昭氏

(運営委員)

D 欲望の整理

東京工業大学教授 吉田夏彦氏

(運営委員)

E 新しいヨーロッパと日本の将来

東京大学助教授 木村尚三郎氏

(運営委員長)

〈参加学生〉97名(内女子36名)

津田塾大(14)、東大(12)、早大、

東女大(各7)、東工大、東外大、

中大、ICU(各5)、明大(4)、

慶大、明学大、独協大、東京農大

大

(各3)、お茶の水女大、横浜国大(各2)、一橋大、東京医歯大、電通大、青学大、立大、日大、武蔵工大、成蹊大、上智大、東経大、東洋大、専修大、工学院大、玉川大、白百合女大、清泉女大、都留文科大(各1)、合計32校

◇◇◇ 今回のセミナーは開館十周年を記念して特に企画されたもので、共同セミナー委員会の正副委員長

木村尚三郎、宇野重昭、吉田夏彦の三先生に運営委員としてご登場

いただくことよって、明日に向かって進むセミナー・ハウスを祝福

するにふさわしい総合テーマと別掲のような陣容と規模を備えたとす

ばらしいセミナーを実現することができた。

人類史上かつてなかった地球規模での危機が叫ばれ、文明そのものが大きな歴史的転換期にさしか

かっている今日、日本が明日の世界にどのような生き方していくべきかを五つのセクションから多角的に

考察しようとしたもので、運営委員の三先生がそのままセクション

も担当されたほか、茅陽一、公文俊平のお二人の先生が加わられ

て、一〇〇名に近い学生の熱心な

参加に支えられた。

初日の全体講義で糸川英夫先生は、明日の科学技術の見通しと、これを使いこなしていく人間の心

構え、教智の必要を、豊富な具体例、鋭い仮説そしてユーモアを縦

横無尽に駆使して語られ、その後につづく各セクションの演習に大

きな知的刺激を与えられた。

二日目の午後には開館十周年記念行事がプログラムに組み入れら

れ、参加学生は記念会、記念シンポジウムから夜の交歓の集いに至

るまで、またとない特別プログラムを心ゆくまで楽しんだようであ

った。

記念シンポジウムにおける大塚久雄、板垣與一両碩学のお話は、

参加者一同に深い感銘を与え、

一度お目にかかりたかった「書物では得られない体験だった」

「大変むずかしかったが、明日の日本を考えるにふさわしいシンポジウムだった」といった素直な感想がきかれた。

参加者の多くは、このセミナーに参加して「広い視野からものを見る思考の必要性を痛感した」と語り、記念会については「セミナー・ハウスの歴史について認識を深め、その意義を改めて知らされる機会となった」と語っている。

80回目にあたるこの記念セミナーが、当ハウスにご縁の深い先生方のご協力によって、期待どおりの成果を取ることができたことは、まことに幸わせなことであった。

参加学生の感想から

渡辺邦子

共同セミナーに参加したのは今度が初めてでした。大学間のワクを越えて共に勉強できるのはすばらしいことだと思います。

大学においては、あるテーマを取り上げても、それが学問の域を越えないように思われるが、このセミナーでは現実問題としてとらえていくことができたと思えます。もう一つの収穫は、自分の大学の先輩はもちろんのこと、他の大学の学生との話し合いを持てたことです。みんなの感覚の鋭さに

は驚いてしまいました。ずいぶん

「一度お目にかかりたかった」書物では得られない体験だった

「大変むずかしかったが、明日の日本を考えるにふさわしいシンポジウムだった」といった素直な感想がきかれた。

参加者の多くは、このセミナーに参加して「広い視野からものを見る思考の必要性を痛感した」と語り、記念会については「セミナー・ハウスの歴史について認識を深め、その意義を改めて知らされる機会となった」と語っている。

80回目にあたるこの記念セミナーが、当ハウスにご縁の深い先生方のご協力によって、期待どおりの成果を取ることができたことは、まことに幸わせなことであった。

野猿峠へ向かうバスの中で、私の心には、このまま引き返してしまいたいという不安と、初めてのセミナー参加への期待という矛盾した気持がありました。そして今の私は、もっと前から参加していたらと少々悔しく思っているのです。四年間の大学生活でも最も印象的で有意義な経験を持つことができませんでした。多くの友人を得ることができたと同時に、他の大学、他の分野の方々の考え方を知らない機会となりました。

今回は開館十周年記念ということもあり、特別の催し物にも参加させていただきました。ボン・ファイアの前で学生達に胴上げをされていた飯田先生の笑顔が思い出されます。飯田先生は接する人をみんな先生のファンにしてしまうという超能力の持ち主なんです。先生にお会いできて本当に良かったと思っております。

セミナー・ハウスは確かに教育の理想の場であると思います。またそうであるだけにセミナー・ハウスを支える人々の苦勞は大きいものではないでしょうか。

セミナー・ハウスが今後も発展していくことを、そして飯田先生がいつまでも健康でおられて、二十周年、三十周年とこのセミナー・ハウスを見守って下さることを願わずにはいられません。

(東京大学法学部2年)

(白百合女子大学国文科4年)

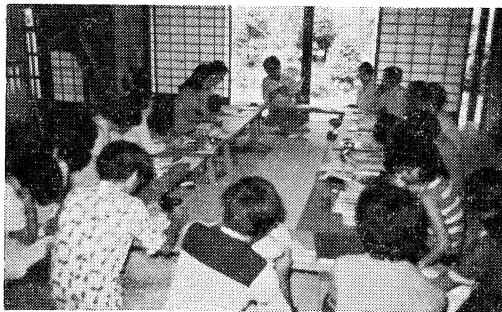
松浦 幸子

●業務通信

予約申込みの人数と実際に来館された時の人数には、毎月のことながら大きな開きがある。例えば9月は六二〇人、10月は三四一人、交通ストの影響を受けた11月には更に差が開いて一、二四七人となった。フロントの係は、申込みの人数に少し余裕を見て部屋割りをしているので、その数は更に大きくなってしまふわけである。他の利用者に迷惑がかかるのでできるだけ実数に近い人数で予約申込みをされるよう皆様のご協力をお願いいたします。

▽△

会員校こそ当ハウスの中心なの



第79回大学共同セミナーのCセクション (遠来庄)

で、その利用率を六〇%までふやしたいというのが当ハウスの目下の念願である。できるだけ便宜を図っているが、空室をつくりたくないもので、早目に申し込んで下さい。ことに新入生オリエンテーションのように、または学科単位のセミナーのように多人数の場合には、急に割り込むことはできないので、早いことが肝心です。

▽△

もつとも一方では、大学のゼミナール以外にも多くの常連の利用者が出来たことはうれしいことである。白百合学園高等学校の修養会は毎年利用されるグループの一つである。この度は開館十周年のお祝いにと、紅白二本のはなみずきを携えて利用された。また社会人では明治屋もこの秋で数回の利用をされたが、開館十周年のお祝いパーティには明治屋特製のジュースを寄贈して下さい。常連とは誠にありがたい方々である。

しかし、この秋に初めて利用された団体もある。9月にはユネスコ・アジア文化センター主催の出版技術研修コース、10月には日本地球化学会、11月には日本人類学会などがあげられる。会員校が学会の当番校になられて当ハウスを利用されるのは最も賢明な利用者であらう。

次に、別掲の「大学セミナー・ハウスの三日間」で、ユネスコの出版技術研修コースの模様を紹介しよう。

●昭和51年度の利用料金の改訂について (予告)

改訂について (予告)

オイルショックに端を発した物価の高騰は日本の社会に経済的打撃を与えました。したがって昭和50年度には各施設とも料金の値上げを行いました。当セミナー・

ハウスでは利用者の対象が学生であることを考えて、値上げをせず現在に至っています。物価、人件費、電力と石油などが次々と値上げしますので、経営上、大変苦しい思いをしています。

一般に料金の値上げが終ったようですから、新年度から二、三割の料金値上げをさせて頂いていただきます。と思います。

大学セミナー・ハウスの三日間

ユネスコ・アジア文化センター主催の出版技術研修コースより

出版技術研修コースより

9月10日(水)

研修生一同、緑深い八王子の丘陵地帯に広がる大学セミナー・ハウスに夕刻到着。都会の雑踏から逃れて、研修生は誰もホッとしたり様子。どうしてここでずっと研修を行わないのかという声もチラホラ聞かれたほど。

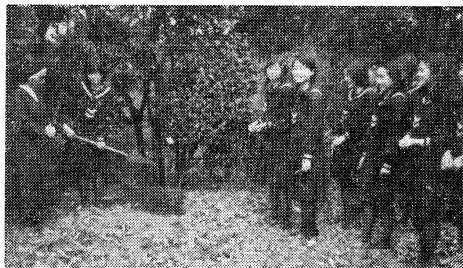
宗教の違いにより牛肉、豚肉を食べられない人がいたり、完全な菜食主義者もいたりして、食事のメニューにはいつも頭を痛めるのだが、セミナー・ハウスの特別献立は我々の不安をふつ飛ばすもの。チキン、マトン、野菜、卵と限られた材料ながら豊富な献立で、カレー、チリ、その他のスパイスをたっぷり使ったアジアの人の口にあう工夫されている。研修生も故国での食事のようだと嬉しさに顔をほころばせていた。

9月11日(木)

午後四時頃、各国レポートの報告が終わると、飯田宗一郎館長をお迎えし、大学セミナー・ハウス創設の由来、活動目的、運営方法についての談話を伺った。飯田さんを囲んでのなごやかな一時間半、飯田さんのロマンと情熱に満ちあふれたお話に誰もが圧倒された様子で、感嘆の声を連発していた。

9月12日(金)

午前中、日本の伝統文化の一面を研修生にじかに感じてほしいという意向から、セミナー・ハウスの渡辺礼子さんをお願いして、遠来荘でお茶をたてていただいた。遠来荘は多摩地域の旧民家を移築したもので、わらびき屋根、いろいろ、床の間つきの日本間など、研修生も興味深げである。茶室に通された研修生達は慣れぬ正座に、



白百合学園高校生たちによる記念植樹 (出会の丘)

さてこれから一体どうなるのかなといった面も。

お茶がたてられると、まず正客の席に坐ったチャードリー氏が一服にただく。神妙な顔つき。やがて次々にお茶が運ばれ、教わったばかりの飲み方で皆おいしそうに(。い)ただく。二回に分けたお茶席で全員お茶をいただく、渡辺さんに「茶の湯」についての質問が殺到。

昼食後、飯田館長をはじめ我々の為にひとかたならぬ協力して下さいました方々の見送りを受け、またセミナー・ハウスの職員の手作りという紙細工のひな人形をおみやげにいただいた研修生は、感謝の気持と短くも楽しかった思い出を胸に残して、セミナー・ハウスを後にした。

(アジア文化ニュース42号より抜粋)

新年のご挨拶を申し上げます

館長日記から

◆多摩の丘の元日はのどかである。私は丘を一巡して、いままらのように十年の歩みを回顧した。構内の処処で約二〇校の写真をうつした。今年は第二十周年の第一年目に当るので、十年後の変化に対比するため、元日の姿を記録しておきたかったからである。◆昨年は開館十周年記念行事を催すたびに、多くの方々に招待や案内の手紙を書きました。そんなわけで格別ご無沙汰もしていないように思い、年末多忙でもあったし、今年は賀状を節約した次第です。欠礼の段はお許し願います。◆低成長時代の幕明けである。国家予算も窮屈になり、経営の一助にしたい、補助金二百万円の増額を要望したが、ついに実現しなかった。国にたよるにも自ら限界があるように思われる。民間事業として活力ある自由な教育を行うためには共同体意識に支えられた後援会を育成する以外に方途はあるまい。

◆大学共同体としての大学セミナー・ハウスを日本の大学社会の中に築くことが創立以来変わらない基本的姿勢である。国公私立大学を会員校とする法人組織と大学人など個人の協力者を維持会員とする千人会こそは、その共同体の実体である。連帯の輪が年毎にひろがることは共同体が存在している証しである。◆旧臘に大切な協力者を失ってしまった。痛惜の至りである。お一人は東大名誉教授西洋史学の権威堀米庸三先生であり。早くから共同セミナーのよき理解者であられた。もうお一人は朝日新聞論説委員深代惇郎氏の急逝である。私は同氏の協力を得て、今春には朝日講堂で講演会を開く計画をたてていたのである。「歴史はとうとうと流れている。せきを切って進む流れと、それをじつと見つめる人間を描いたある日の天声人語を思い出します。深代さんの天声人語は多彩ではあったが、ひとつのテーマを追って、無数の短編でありながら、堂々たる長編でした」という永井文部大臣の弔辞は実にすばらしかった。◆昨年、かやぶきの民家が建ってから構内に日本調がたまたまふるさともどった感じである。冬枯れの雑木林の中から炭焼きの煙が上っている風景は静かな自然である。職員の手になる自家製木炭が遠来荘の茶室の釜火に用いられている。私もこの炭火で正月の餅をやいた。久し振りにうららかな新春を味わうことができた。◆郵便料金の値上げは便りを書くことを身上として来た私に大きな打撃を与えた。これまでのように私は手紙を皆様に差し上げることはできないかも知れない。重く重い心境である。

●利用状況

● 11月2日回利用
● 11月3日回利用
● 11月4日回利用
● 11月5日回利用

◆9月

立教大学教授	所 一彦	青山学院大学教授	清水 英夫	東京都立工科短期大学教授	吉田 竜郎
法政大学助教授	生垣 昌之	東京学芸大学教授	鈴木甚五郎	立正大学教授	杉沢 新一
明治学院大学助教授	久世 了	明治学院大学講師	館 逸雄	城西大学助教授	中村 敏昭
津田塾大学 E・S・S*		東京経済大学教授	木下 徳明	城西大学教授	平井 潔
神奈川大学助教授	大友 賢二	明治大学教授	長島 文道	DDR文学会―古典主義文学研究会	
上智大学教授	F・ペレス	明治学院大学講師	原 正彦	会	
大妻女子大学講師	田口 孝夫	上智大学助教授	石村 善助	経済地理学研究会	
学習院大学教授	荒井 良雄	明治大学教授	岩尾 裕純	財団法人ユネスコ・アジア文化センター	
大妻女子大学講師	石井 敏	東京学芸大学キリスト教研究部	神保 信一		
武蔵工業大学助教授	安味 貞正	明治大学教授	富岡 幸雄		
東京経済大学助教授	佐藤 博	慶応義塾大学教授	吉原 功		
工学院大学助手	椋田 実	一橋大学教授	河崎 瓊二		
上智大学講師	Scott Howell	明治学院大学教授	高田 勇		
東京女子大学講師	宮崎 犀一	明治学院大学講師	今村 成男		
学習院大学教授	玉野井昌夫	東京学芸大学キリスト教研究部	檜谷 昭彦		
法政大学教授	野田 正穂	明治大学教授	外池 正治		
東京工業大学助教授	熊田 禎宣	明治学院大学教授	増田 茂樹		
東京女子大学茶道研究会	劉 進慶	東京都立大学教授	安平 哲二		
一橋大学教授	深沢 宏	立教大学教授	日野協力会		
東京大学教授	秋山 虔	東京都立大学助教授	【個人利用】		
日本大学教授	石山 伍夫	東京都立大学助教授	早稲田大学学生		三宅 祐二
立教大学助手	今 邦人	東京都立大学助教授	白梅学園短期大学教授		田中 未来
一橋大学教授	山下 邦男	明治大学教授			
武蔵工業大学教授	界 孝夫	東京大学助教授			
法政大学教授	倉橋 文雄	国際商科大学外国大学生日本研究会			
早稲田大学学生自主ゼミ	高橋 秀	国立音楽大学講師			
立教大学教授	高橋 勝美	産業能率短期大講師			
法政大学教授	益田 久保田 順	横浜国立大学助教授			
立教大学教授	久保田 順	山梨英和短期大学助教授			

◆10月

成蹊大学教授	武田 昌輔
学習院大学教授	野田 良之
東京都立大学助教授	奥口 孝二
学習院大学教授	荒井 良雄
東京都立大学教授	塩崎 進
早稲田大学教授	田村 恭
東京女子大学教授	白井 常
津田塾大学助教授	矢沢修次郎
津田塾大学講師	小倉 充夫
津田塾大学教授	小林 稔
順天堂大学附属医院	

明治学院大学教授 東京大学講師 東京学芸大学教授 明治大学助教授 法政大学教授 電気通信大学助手 中央大学教授 立教大学教授 東京大学助教授 明治学院大学教授 一橋大学助教授 上智大学教授 東京大学教授 横浜国立大学教授 立教大学教授 日本女子大学助教授 武蔵工業大学講師 早稲田大学システム科学研究所 上智大学助教授 中央大学教授 東京工業大学助手 日本女子大学助教授 電気通信大学教授 早稲田大学教授 早稲田大学教授 東京都立大学助教授 慶応義塾大学教授 電気通信大学教授 中央大学英語劇研究会 工学院大学教授 東京都立大学助教授 東京都立大学助教授 東京学芸大学教授 慶応義塾大学教授 東京外国語大学ベトナム古代史研究会	竹内 真一 小和田 恒 関 四郎 橋本 和美 原 薫 菰淵 鎮雄 神品 光弘 鈴木 重生 茂木 虎雄 菊地 昌典 館 逸雄 山沢 逸平 三輪 公忠 関口 忠 伊藤 忠彦 三宅 義夫 小川 信子 曾禰 元隆 松本 栄二 山下 幸夫 大久保喬楠 小島 蓉子 角田 稔 田村 康男 川原 栄峰 矢代 和夫 棚橋 隆彦 神戸謙次郎 加藤ライジ 中本 正智 大羽 滋 阿部 猛 深海 博明	東京芸術大学助教授 南 弘明 清泉女子大学講師 高田恵利子 都立商科短期大学新入生オリエンテーション 産業能率短期大学 白梅学園短期大学新入生オリエンテーション 千葉工業大学教授 関 龍夫 東海大学講師 坂田 長生 日本看護協会東京支部 固体化学研究会 古代法制史研究会 起教派キリスト教聖霊カリスマセミナー 有機地球化学談話会 日本地球化学会 東京高等裁判所 小西六写真工業* 出版販売協会 日本特殊鋼 立川スプリング 東京郵政局 協同組合東友会ボランティアチーム 八王子大丸 日野協力会 イースタン商事 立川スプリング フジタ工業 明治屋 東京都多摩市役所 東京芝浦電気 津田塾大学講師 今井 けい 東京学芸大学助手 水野 孝雄 関西地区大学セミナー・ハウス 茂	芝浦工業大学教授 十代田知三 工学院大学助教授 今井 義夫 安田信託 鳥居 照男 一橋大学講師 佐藤 共子 津田塾大学院生 初鹿野ふじ子 慶応義塾大学教授 田村 茂 東京工業大学教授 武者 利光 大妻女子大学文学部英文学科 和田 重司 中央大学教授 須田精二郎 工学院大学助教授 神保 信一 明治学院大学教授 松田 武彦 東京工業大学教授 藤井 正雄 津田塾大学講師 山岸 健 慶応義塾大学助教授 尾形 健 明治学院大学教授 深海 博明 慶応義塾大学教授 金井信一郎 慶応義塾大学助教授 鳥居 泰彦 東京大学助教授 西田 篤弘 専修大学教授 萩原 稔 東洋大学助教授 小苺米清弘 東京経済大学教授 長島 文道 早稲田大学教授 大頭 仁 早稲田大学講師 島田 征夫 慶応義塾大学助教授 関根 智明 工学院大学教授 波多江健郎 工学院大学教授 中島 康孝 早稲田大学助教授 中根甚一郎 神奈川大学講師 中里 明彦 東京都立大学助教授 川口 士郎 慶応義塾大学教授 有賀 一郎 法政大学助教授 矢田 俊文 中央大学助教授 飯田 浩三 早稲田大学国際学生友好会 川原 栄峰 早稲田大学教授	早稲田大学教授 市川 孝正 日本大学教授 瀬在 良男 専修大学教授 萩原 稔 早稲田大学教授 西宮 輝明 早稲田大学助教授 片山 寛 立教大学体育会 丸山 洋一 東京都立大学教授 平井 久 上智大学教授 岡村 甫 東京大学助教授 岡村 寛 日本大学教授 向坂 寛 明治学院大学第七回総合セミナー 鈴木 二郎 早稲田大学講師 小田中聡樹 東京都立大学助教授 小田 四郎 慶応義塾大学教授 神山 四郎 東京都立大学教授 江藤 价泰 日本聖書神学校 下山 瑛二 東京YWCA学院英語本科 齋藤 寿 日本女子大学附属高等学校 齋藤 健三 駒沢大学教授 和光 健三 和光大学教授 赤木 善光 東京神学大学教授 赤木 善光 白百合学園高等学校 フェリス女学院大学助教授 小塩トシ子 青山学院高等部 早大・東大・外大ロシア語劇研究会 中国問題研究会 堀之内キリスト教会 弓町本郷教会教会学校 ヘルプ・バンングラデッシュ・コミティ ジャスパースキークラブ 日本人類学会・日本民族学会第29回連合大会準備委員会 ボーイスカウト東京連盟西部地区
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

11月

編集後記

本号を開館十周年記念特集号としてお手元にお届けします。記念会にご出席できなかった方々にご報告を申し上げます。出来るだけ当日の様様を再現するように努めました。

したがって不本意ながら本号も一四頁の大冊となっております、なおかつ11月下旬に開催された第81回大学共同セミナー「今日の婦人問題」の記事を次号に送らざるを得なくなりましたことをお詫びいたします。国際婦人年にちなんで企画されたこのセミナーが期待どおりの成果を収めて終了したことを、とりあえずこの紙面でご報告しておきます。

(能)